

メルヴィル・デューイ

Melvil Dewey

堀内 郁子

Ikuko Horiuchi

Résumé

The life and achievements of Melvil Dewey, one of the most influential and effective librarians in the history of librarianship, are presented according mainly to his two biographies by Rider and Dawe. Among his many achievements emphasis is put upon his DDC, library school, library periodicals and library associations.

はじめに

- I. おいたち
- II. アマースト大学時代
- III. ボストン時代
- IV. デューイ十進分類表
- V. コロンビア大学時代
- VI. オルバニー時代
- VII. レーク・プラシッド時代

おわりに

はじめに

およそ世界中の図書館関係者でメルヴィル・デューイの名を知らぬ人はあるまい。彼の創始した十進分類法は、米国内は勿論、世界中に広まり、採用され、デューイ自身も世界中のあらゆる図書館でこの分類法が使われることを夢見た。日本でも勿論デューイは有名で図書館関係者でその名を知らぬ人はあるまいが、デューイ十進分類法を作った人であるという以上にあまり知られていない。そこでこの世界の図書館史上で最も有名なデュー

イとはいかなる人か、どのように図書館界に貢献したかをたどってみるのが本稿の目的である。ちなみにデューイ姓でもう一人世界的に有名な人がいるが、それは John Dewey というアメリカの哲学者、教育思想家で、メルヴィルとほぼ同じ時代に生きた。一般的な百科辞典や人名辞典などを見ると、我等のメルヴィルは出ていなくて、このジョンの方が出ているのでまちがえないようにしなければならない。

幸いにもメルヴィル・デューイは 15 才頃から大学時代までかなり克明に日記をつけていたし、彼の死後その

堀内郁子： 慶應義塾大学日吉情報センターテクニカル・サービス課課長代理，同大学文学部図書館・情報学科講師
Ikuko Horiuchi, Chief Cataloger, Technical Service Section, Hiyoshi Library and Information Center, and
Lecturer, School of Library and Information Science, Keio University.

未亡人 Emily Dewey と彼に最も関係の深かった友人 Mary Eileen Ahern と Walter S. Biscoe の3人が集って、資料や文献が散逸してしまわないうちに彼の伝記をまとめておくべきであるとの結論に達し、多くの友人や彼の信奉者に呼びかけて協力を得、詳しい伝記を出版した。これは Grosvenor Dawe が編さんした“*Melvil Dewey; seer: inspirer: doer, 1851-1931*”という本で、デューイ自身の設立した Placid Club から1932年に限定版で出版され、今では米国でも入手しがたい貴重な本となっている。また、デューイの側近の1人として毎日彼と共に働いた経験があり、デューイのめいと結婚した Fremont Rider が簡潔にまとめたデューイの伝記¹⁾もある。これは米国図書館協会の発行で、同協会が企画した American Library Pioneers という叢書の中の1冊になっている。その他デューイについて書かれたものは枚挙にいとまもないので、それらをもとにしてこの1文を草する次第である。

I. おいたち

Melville Louis Kossuth Dewey は1851年12月10日にニューヨーク州の Adams Center という所で生れた。父 Joel も母 Eliza もともに典型的な開拓者の家に生れ、頑丈で、つましく、信心深い人達であった。Dewey 姓の多くの人々がそうであるように、このデューイ家も英国ウェールズの出身で、大体農業を営んでいて一朝事が起れば銃をとって兵士となるというような暮しであった。メルヴィルの父は百姓のかたわら雑貨屋を営み、靴を作って靴屋もやっていた。しかしあまり商才にはたけていず、売かけ金ばかりがかさんで収益をあげることができなかった。

デューイの少年時代の日記を見ると、「午前中畑で働く」「母を手伝って家の掃除」「道普請をする」「窓ガラスを磨く」「ミシンの分解掃除をする」「終日薪を割り、積み上げる」「倉庫から雑貨を運ぶ」等々の記載がくりかえし出て来て誠に働き者であったことがよくわかる。そのあい間に川へ魚をとりに行ったり、それで滑ったり、将棋を指したり、池へ鴨をとりに行ったりというように全く金のかからぬ田舎らしいクリエーションもやり、きわめて健康的な生活である。その他の彼の日記に出てくる事柄は勉強と読書についてで、家で勉強し、マコーレーの英国史、スコットの「湖上の美人」等を読んだというような具合である。12才の時お使い等をして働いてためた小遣いが10ドルになったので、かねて欲

しかったウェブスターの大辞典を買いに11マイルも離れた町へ出かけた。ところがこの辞書はあまりに大きく重く、これを家まで運ぶのに、また大事な小遣を使わなければならないかった。

デューイはこのように勤勉で努力家で、勉強もよく出来たが、特に算数に優れ、ほかの子供が筆算でやる計算を暗算で稲妻のように早く処理したという。また何かを組織だて、分類するのが大好きで、母の食品、食器置場を整理して仕分けするのが好きであった。1866年12月10日15才の誕生日の日記には、

今日午後自分の体重と身長を計った。体重は125ポンド、身長は5フィート1インチ $\frac{1}{4}$ であった。所有物は50ポンド相当の衣類、50ポンド相当の書物、25ポンド相当の道具等である。

と記してある。その後10年間毎年誕生日には、同様の身体および財産に関する記録を日記に書き記している。

II. アマースト大学時代

1870年にデューイは Amherst College に入学し、1874年に卒業したが、1876年まで大学に残って修士課程をおえた。大学時代の彼は少年時代と同様勤勉でまじめによく勉強した。学費が充分でなかったから、働いて補わなければならないが、生来内気なところがあって、学友とのつきあいはあまりなかった。「我が交際費は他の学生より僅少である。なぜならばほとんど交際を避けているからである。それで満足である。」と日記に書き記している。しかし彼は Antivenenean Society という麻薬、煙草を禁止することを目的とする協会に属し、忠実な会員であった。

大学生生活では誰でもごく自然に友達ができるものだが、デューイはそうでなかった。ただ例外的に Walter Stanley Biscoe とだけは親しくなり、その後生涯この友に支えられた。

デューイは常に自分の貴重な時間や労力を節約することに努め、工夫していたので、その一つのあらわれとして速記術を独学で修得した。そして日記、ノート、演説の原稿などに活用したが、自分でよいと信じたことは、ひとにやらせたい熱意に燃えるたちだったので、周囲の学生達に速記を教えはじめ、他の科目と同じように授業を行なった。これは大学当局が認めたものでなく、デューイが自発的に行なったもので、これがどんどん大規模なものになってくると、当局はこの授業を禁じた。しかしデューイが何も報酬をとらないならば許可するという

ことになると、彼は毎日4時間ずつ大勢の学生に速記術を教え、これを何か月も続けた。速記術のほか略語や綴りの簡素化にも熱心で、自分の Melville Louis Kossuth Dewey という名前も最初 Louis をとり、次に Kossuth もとり、さらに Melville の最後の le をとり、しまいには Dewey も Dui とちぢめたが、周囲の反対で姓だけはまた Dewey に戻したといういきさつもある。彼が若い頃および晩年に常に用いていた綴りの省略は次の通りである。²⁾

Melvil Dewey's Notehand Breves

about	abt	it	i
after	aft	just	j
again	ag	kind	k
against	agst	know	no
always	alw	large	lrj
am	m	like	li
an	a	mark	mk
and	&	man, many, men	mn
are	r	may	m
as	z	might	mi
at	a	more, most	mo
be, been	b	much	mu
because	bc	must	mst
before	bf	neither	nei
better	btr	never	nvr
between	btw	no, nor, not	n
both	bo	of	v
business	bz	oh, on, only	o
but	bt	or	r
came, come	cm	other, others	oth
can	c	our	r
could	cd	over	ov
do, does, done	d	own	o
each	ea	part	pt
either	ei	person, persons	per
ever, every	ev	public	pb
except	xc	quite	q
extra	x	right	ri
for	f	said	sd
from	fr	shall	sh
good	gd	should	shd
give	gv	since	sns
great	g	some, same	sm
had	hd	soon	sn
has, have	h	subject	sbj
her, here	hr	such	su
him	hm	take, took	tk
his	z	than, then	thn
in	i	that	tt
is	z	the	e
		their, there, they	th
		these, those	thz
		this, thus	ths
		thought	tht
		thru	thr
		time, times	ti
		to, too	t
		toward	twd
		under	u
		up, upon	p
		very	vr
		was	wz
		we	w

were
what
when
where
while
which, who, whom
whole
whose
why
will
with
work
would
year
you
your

wr
wt
wn
whr
whl
wh
whl
whz
y
l
w
wk
wd
yr
u
ur

彼は第2学年になってから大学の図書館で働き出した。多分学費をかせぐのに適当な働き場所だったからであろう。ここで彼は後に述べる十進分類表の草案を作り、大学当局に提出し、これで図書館の本の整理をすることを許され、本の配列をやりなおした。彼はその他の図書館業務に関しても色々新しい考えを展開し、それらを実地に行なったり、多くの人々にもすすめたいと思った。アマースト大学当局ではデューイの図書館での働きに満足していたから、図書館にとどまって働くことを期待したが、デューイは一大学図書館にとどまることなく多方面で大きく活躍したいとの望みを捨て難く、1876年この大学を去ってボストンに移った。

III. ボストン時代

A. 図書館協会

1876年という年はデューイにとっても図書館界にとってもきわめて重要な記念すべき年であった。まず第一に、最初の図書館団体としての米国図書館協会が設立された年で、デューイはこの協会を作り出す為の大きな原動力となった。たまたまこの年は米国建国100周年にあたり、これを記念してフィラデルフィアで万国博覧会が開催された。これを機会に図書館員も集って会議を開きたいという意見が起り、デューイはこれをとりあげてその実現に勢力的にとりくんだ。各方面にたくさんの手紙を書き、図書館員仲間の無関心な人や懐疑的な人々を説得し、要路の人々に援助を頼み、必要な刷り物を作ったりしたが、これらを全部自費でやった。そして遂に10月4日から6日までの3日間フィラデルフィアではじめて図書館員会議を開くことができた。その最終日に米国図書館協会を成立させ、Justin Winsor が会長となり、

デューイが事務長となった。それから15年間デューイはかわらぬ情熱をもって無報酬で事務長をつとめた。彼は、晴れがましい職につくとか、自分の名を売りたいというような気持はなく、専ら協会のため、図書館界のために働くことに満足していたが、1890年に周廻からのたつての要望で会長になった。現在の米国図書館協会は30,000以上の会員を擁する大世帯で専任の職員もたくさんいるが、協会が発足してから15年間は、協会のあらゆる事務をデューイが1人でひきうけ、デューイの机の抽出しが協会事務局であった。デューイが協会を創立したというのは正確な言い方でないにしても、彼が協会を維持し発展させたということはまちがいない。

米国図書館協会が設立されて間もなく、英国でも図書館協会が作られる機運が生じ、デューイは数人の図書館員と共に英国に渡り、米国図書館協会を紹介し、英国の図書館協会作りを援助した。

さらに、現在も続いているニューヨーク図書館クラブを作り、ニューヨーク州の図書館協会をも設立した。

B. 図書館雑誌

Library journal といえは世界最古の有名な図書館雑誌であるが、この雑誌はデューイとその2人の同志、Frederick H. Leypold と R. R. Bowker によって1876年に創刊された。これより少し前、レイポルドは出版業界に完備した販売目録が必要であると痛感して、*Weekly Trade circular* というものをニューヨークで発行していた。これは後に *Publisher's weekly* となったのであるが、この中には図書館に関する欄が設けてあった。デューイはボストンに住んでいたが、彼もかねてから図書館界のために雑誌が必要であると考えており、レイポルドのことを知ると早速ニューヨークに出かけ、レイポルドとその仲間ボウカーの3人で会談し、レイポルドの *Weekly trade circular* の図書館の欄を切り離し、独立の図書館雑誌 *Library journal* を出そうということに話がまとまった。レイポルドはニューヨークにいて雑誌の発行にあたり、デューイはボストンで雑誌の編集を受けもち、ボウカーが総編集長となって出発した。デューイとレイポルドは似たような性格で、どちらも理想家肌で目標に向って激しい情熱で突進するたちで、そのためには経済上の収支をつぐなわすことなどは眼中になかった。ボウカーは銀行家のように冷静で実務的な才能があり、このつっ走る2人の財政的破たんを救って、たちまちつぶれてしまいそうな雑誌を継続させ、隆盛に導いた。*Library journal* の初期の頃は、ボウカーの全収入

をこの雑誌につきこんだ。それでもこの雑誌は創刊後数年間は赤字続きで、1880年にボウカーがロンドンに出かけたことがあったが、その頃財政上の危機はクライマックスに達した。それでもレイポルドは次々と大へん費用のかかる出版企画をたてては実現しようとするので、遂に *Library journal* は一時休刊のやむなきに至った。

Library journal がなくなってみると図書館界はこの雑誌の重要性に気づき、予約購読の申し込み、広告掲載の申し込みがふえた。デューイは他にもたくさん仕事をかかえて多忙を極めていたので編集の仕事を C. A. Cutter にまかせた。米国図書館協会とは、毎年開かれる大会の議事録の印刷をすることにより、*Library journal* が特別補助金を受取りときめができた。このような各方面からの協力によってこの雑誌の会計ははじめて損得なしという所にこぎつけた。

レイポルドをはじめ図書館のこだけの独立の雑誌を作っても記事が充分集まらないのではないかと危惧を懐いたが、デューイは編集者としてその点は自信があった。彼自身たくさん原稿を書いたし、人々を説得して書かせることもうまかった。彼自身の原稿提出はいつもおそく、印刷屋泣かせであったが、その原稿の内容は充実していて、たえず能率的であること、有用性を高めることに対する情熱の溢れたものであった。レイポルド、デューイ、ボウカーの3人ではじめた *Library journal* は、1880年にレイポルドが死に、デューイも編集から手をひいたので、ボウカーがひきつづき経営して Bowker 社の出版となり、現在に至っている。

Library journal の編集をやめてから、デューイは独力で第2番目の図書館雑誌 *Library note* というものを発行した。これは1889年から1898年まで続き、デューイがアマースト大学およびコロンビア大学の図書館で先駆的に行なった図書館経営および実務についてのデューイの考えの真髓が述べられている。たとえば図書の配列方法をわかりやすく、能率的にすること、目録や図書館案内を整備して利用しやすくすること、図書館は奉仕のための場所、サービスが如何に重要であるかということ、開館時間をながくし、大学図書館は文化の中心として市民にも開放すべきこと、利用者が来るのを手をこまねいて待っているのではなく、あらゆる機会に PR して積極的に利用を促すべきこと等について情熱をこめて力説した。

C. その他

デューイの十進分類表はこれまでアマースト大学図書

館の分類表として、1図書館内の分類表であったが、1876年は、これが標準的な図書分類表として世間一般にひろまり始めた年であった。

デューイはまた、図書館用品や設備を専門に作って販売する機関が必要であるとして、Library Bureau の構想をたてその仕事にも着手した。

これらの各種図書館活動のほかには彼はまたメートル法の改革と綴字の改革にも情熱をもち、自宅に “American Library Association”, “American Metric Bureau”, “Spelling Reform Association” の3つの看板を掲げてそれらの事務所とした。彼はこれらの仕事をほとんど無報酬でやったので、ボストンに移り住むと間もなく大きな借金を抱えてしまった。

ボストンに来たことは、別の面でもデューイに重大な意味があった。というのは、ここで彼は生涯のよき伴侶となる婦人と出あったのである。彼がハーバード大学図書館を訪れて、彼の分類表の話をした処、館長等が非常な関心を示し、重立った館員達に分類表について話をしてくれるように頼まれた。ウェルズレイ大学 (Wellsley College) の図書館で働いていた Annie Roberts Godfrey はかねてからアマースト大学図書館の分類表について伝え聞いて興味を持っていたので、ハーバード大学でのこのデューイの講演を聞きにきた。そしてはじめてデューイとあったが、それから2年間同じ図書館畑で働く者として交際を続けた後、1878年10月19日に2人は結婚した。

アニー・ゴッドフレイがはじめてデューイに会ったのは25才の時、その1年前からウェルズレイ大学図書館の責任者として働いていた。彼女は Vassar College の学生であったが、ウェルズレイ大学が開設されるにあたり、望まれてその図書館に勤めることになったのである。ハーバード大学で会ってから後は、2人は図書館の種々の分野にわたって共通の問題をもっていたので文通を続けた。アニーがデューイの分類表について質問し、デューイは分類表が印刷されるはこびになると、その校正刷をいち早くアニーに送ったりという具合である。フィラデルフィアで第1回の図書館員の集会が開かれた時、婦人の参加者は10人であったがアニーはその1人であった。

1887年にイギリスではじめて図書館協会を作ることになった時、アメリカの図書館員の小グループがそれを援助するために出かけて行ったことは前述したが、デューイと共に彼女もこのグループに加わった。こうして2人

は急速に親しくなる機会に恵まれたが、アニーはデューイがあまりに情熱家で偉大な才能の持主であることを知り、自分が妻となった場合、果してそれが彼にとってプラスになるのかマイナスになるのかを疑い、悩んだ。また、ゴッドフレイ家では、アニーとデューイとの結婚には反対であった。ニューヨーク州の田舎から突然あらわれた文なしの熱情家が、ボストンの良家の令嬢にふさわしいとは思われなかったのである。しかしゴッドフレイ家の人々も金銭にこだわらぬ善意の人々であったし、デューイも創意工夫に満ちた有為の青年であることが認められてきて、結局2人の結婚は許され、祝福された。結婚してみると、アニーはデューイにとってはまたと得難い理想的な妻であった。彼のいづく抱負に共鳴し、適切な忠告を与え、彼の健康管理に心を砕き、こまごました雑事から彼を守った。彼女は自分自身の私生活は全く放棄して家庭をデューイの仕事仲間や教え子達に解放した。また、どんな正しい考えでもそれを実現するためには非常な努力がいり、それには莫大な費用と時間もかかることをわからせるのに骨を折った。デューイの決定は彼女の決定であり、彼女にとって彼はいつも正しかった。彼女のこの信念は生涯かわらなかった。

IV. デューイ十進分類表

デューイ十進分類表は、周知の通り、初版が出ていた約100年間広く世界中で使われている最も有名な分類体系である。デューイは多方面で勢力的に活躍した人であるが、何とんでもこの分類表を作り出したことが最大の貢献である。しかもそれを22才に満たない学部学生の時期になしとげたことは驚異に値する。その頃図書館の本の配列法といえば、本の主題内容には関係なく、ただアルファベット順にならべたり、受入れ順にならべていたから、探すにもしまうにも実に骨が折れた。デューイはこれを何とかもってやさしく能率のよい方法に改めなければならないと考え続け、その方法を探し出すべく、50以上の図書館を訪問し、館長等と分類について語りあったりして模索していた。ある日曜日教会で牧師の説教を聞いている時も、デューイはこの問題に屈託していたが、突如稲妻のようによい考えがひらめいた。³⁾それは、アルファベットより簡単なアラビア数字の0から9までを記号として使って、あらゆる記録された人類の知識を順序だてることであった。基本的な考え方はこのように素早く浮んだが、それを展開して実際の分類表を完成するまでには大変ひまがかかり、多くの人の協力

を必要とした。しかしデューイはとも角彼の分類体系の主旨と大要を覚え書としてアマースト大学の図書館委員会に提出したところ、同委員会の賛同を得、早速図書館の資料の分類替えに着手した。これには彼の級友のWalter Stanly Biscoeが手伝い、分類表の拡充にも協力した。またアマースト大学の教授の中には夫々の専門分野について助言を与えた人々もあった。その後3年間実際に図書进行分类してためし、種々変更、改善を加えて1876年にはじめて“*A classification and subject index for cataloging and arranging the books and pamphlets of a library*”として印刷に付した。この初版は12ページの序説と12ページの表と18ページの関連索引からなる42ページの小冊子で1000部作られた。

これより少し前、同じ年の万国博に際して米国教育局(文部省)から図書館報告として“*Public libraries in the United States of America*”が出された時、デューイの分類表はまだ草稿の段階であったが、すぐれたものと見なされて、この報告書の中におさめられた。

9年後の1885年に第2版が作られ、これは“*Decimal classification and relative index by Melvil Dewey*”という標題で出版された。大きく増補され、表の部分190ページ、索引は80ページとなった。記号も3けた以上のものがふえ、6けたの項目もでき、形式区分等の助記表も加わった。また項目の場所をかえた部分もかなりある。これについてデューイは、この表を使って12年間ためた経験から、慎重に考慮した上の変更であって、これで各項目の場所は定着したので、今後は変更は起らないであろうと序説で述べている。その後57年間に第14版までの12の版がデューイ自身の手で作られたが、次第に表が展開されページ数が多くなっても、項目の大きな移動はなかった。

デューイの死後1951年にMilton J. Fergusonの編さんで第15版が作られた。これは、これまでの表の用語等をもっと近代化し、標準化し、項目の展開を平均的に行うようにという利用者の要望を極度にとり入れ、第14版よりも圧縮したものを作り、標題を“*Dewey decimal classification and relative index devised by Melvil Dewey*”としたが、できたものの評判はよくなかった。

第16版ははじめて米国議会図書館の手によって編さんされ、本表と索引とを各1冊づつに分け2冊で1セットとした。内容的には14版に近いものとなった。この版は多くの改善を計ったが、現場の図書館では、表に変更が起ると自館の目録をなおさなければならなくなり、

その経済的負担にたえられないので、できるだけ変更しないしてほしいとの要望が強く、表に一貫性をもたせたり、理論的にすっきりさせることは充分にはできなかつた。その後 17 版、18 版と改訂されて現在に至っている。

デューイ十進分類表（以下は DDC と略す）はどのような規模の図書館でも使えるように意図され、記号も 3 けた以下は必要なければ使わなくてよいことになっているが、ごく小さい図書館やふなれた図書館員のために DDC の簡略版も作られた。1894 年から 1965 年までに 9 版をかぞえている。簡略版の 4 版から 9 版までは、それぞれ詳細版の 12 版から 17 版までをもとにして作られている。

DDC の構成とか記号法とか相関索引等のおもな特長は日本十進分類法に巧みにとり入れられて、多くの日本の図書館でも親まれているのでここでは省略する。

DDC が米国英国のみならず世界の国々で広く使われていることは周知の通りだが、その理由の第 1 は、記号法が単純明快でどんな人にもよくわかることであろう。第 2 は、全体の構成をみだすことなく、古い項目を展開したり、新しい項目を挿入することのできる弾力性である。この性格があるために時代の変遷の目まぐるしいこの 100 年もの間この分類表が使われ続けてくることができたのである。また DDC の歴史を通して最も特長なことは、その編集当局が絶えず中央および末端の利用者の声をきき、その要求にこたえ問題を解決しようと努力してきたことである。17 版の編さんに当っては、国内のみならず、諸外国に編集委員を派遣して、現地の生の声を集め要望をいれる努力をした。

このようにして DDC の普及率は高まってゆき、1954 年米国では 85% の大学図書館と 98% の公共図書館が使っていて、DDC と分類表とは同義語として使われた。しかし DDC に対する批判も色々あり、第二次大戦後には米国のかなりの大学図書館および少数の大公共図書館が DDC から米国議会図書館の分類表 (LC) にぎりかえた時期があった。今ではその傾向も衰え、分類表を他のものに切りかえることの大変さから、イリノイ大学図書館のような大図書館でも DDC のままでゆくことに決定した。

DDC の初版から 17 版までの出版年と頒布された部数を示すと次の通りである。

版次	出版年	頒布部数
1	1876	1,000
2	1885	500

3	1888	500
4	1891	1,000
5	1894	2,000
6	1899	7,600
7	1911	2,000
8	1913	2,000
9	1915	3,000
10	1919	4,000
11	1922	5,000
12	1927	9,750
13	1932	9,340
14	1942	15,632
15	1951	22,245
16	1958	31,011
17	1965	37,136 ⁴⁾

DDC に対する批判の一つは、分類項目の移動とか変更の問題である。歴史の古い大図書館の現場からは経済上の問題から、分類表の変更反対の声が強いし、パブリック・サービスの側からは、分類体系は学問知識の発展変化に対応すべきであるとの要望が強く、この 2 つの矛盾する要求を統合して止揚する方法がなく、そのために分類表の改善変更が不徹底となってどちらの側からも満足されないことである。また別の批判は、全宇宙の森羅万象にわたる知識を 10 づつに区切ることは不自然であり、知識が細分化して出版物の内容が極端に専門化してくると、分類表もこれに応じて細密となり、助記表等を使って分類番号を組立てるような指示が多くなり、分類記号が非常に長くなるという問題がある。米国議会図書館で与えた分類記号の長いものは 15 けたから 16 けたになるものがある。DDC の編者はそれぞれの図書館の事情に応じて、3 けたより後の記号はカットしてもさしつかえないことをくりかえし述べているが、16 けたもある場合どの辺でカットするかも問題である。そこで 1969 年から始まった米国議会図書館の計算機を使った目録テープでは、切ることでできる場所には斜線を入れて示してある。

DDC は 1924 年までは直接デューイとその協力者達の手によって管理されていたが、1924 年からは Lake Placid Club Education Foundation にその著作権を委譲した。委譲に当っては、DDC によってその必要経費以上に収入があった場合、全部を DDC の改善のために使うという条件を付した。この財団は DDC の発展と頒布のための機関として Forest Press, Inc. を作った。そし

て 12 版から 15 版まではこの Forest Press で雇った編者と職員によって作られた。デューイ自身も 1931 年末に死ぬまでこの仕事に関与した。

第 15 版が大図書館や理論家達に不評を買って後、1954 年に米国図書館協会の斡旋により Forest Press と議会図書館とは協定を結び、Forest Press が議会図書館と議会図書館の人員に費用を支払って第 16 版と簡略版第 8 版を作ることとなった。以後同じシステムで 18 版までできており、目下 19 版の改訂の準備中である。

V. コロンビア大学時代

デューイはアマースト大学図書館を去って以来、図書館に関する多くの考えをあたためていたが、それらを实地にためてみる機会がコロンビア大学において訪れた。1883年にコロンビア大学では新しい図書館の建物を建築中で、大学の各所にちらばっている資料を集めて大学の教育研究に役立つよう組織する力量のある図書館長を探し求めていた。同大学の教授 John Burgess はデューイがアマースト大学図書館で目ざましい活躍をしていたことを知っていたし、学長の Frederick A. Barnard はメートル法の会議でデューイと面識があったので、2人はデューイに館長の職に応募するよう勧めた。デューイは 1883 年 4 月 18 日に行なわれた大学評議員会の特別委員会にあらわれ、大学図書館の管理運営についての日頃からもっていた彼の抱負を語り、図書館員を養成するための学科（米国では Library school という語を使うが、この school は大学の中の一専門課程であるから、日本の大学にあてはめれば学科にあたる）を作することを提案した。デューイの話をきいた評議員諸氏は非常なる感銘をうけて、デューイを大学図書館長に任命することを決めた。5 月 7 日に評議員会は年俸 3,500 ドルで 3 年間の契約でデューイを館長に任命し、ライブラリー・スクールを作る件は特別委員会に負託した。デューイは就任に際して一緒に雇われるべき館員のリストを提出して承認されたので、ウエルズレイ大学を卒業したての若い女性 6 人を連れて来た。当時コロンビア大学で働いていたのはいかめしい男性ばかりでまるで僧院のようであったから、彼女等の雇入れが認められたのはデューイの熱意によるもので破格のことであった。デューイはこれらの職員を駆使して、大学内の各所にちらばっていた図書館資料を全部この新しい中央図書館の管理下におき、それらをよりわけ、不要なものは廃棄し、分類し、目録をとったので、はじめて著者や書名や主題から図書

を探することができるようになった。こうして整理してみると、蔵書全体として欠けている部分があり、アンバランスが目立ったので、教員その他の協力でそれを埋め蔵書の質の向上に努めた。勿論分類はデューイの十進分類表を使ったが、デューイがコロンビア大学に在職中に分類表は第 2、第 3 の新しい版が作られた。

デューイは図書館の案内図やどんなサービスが行なわれているかを大学要覧や図書館年報などに示して学内での図書館の PR にも努めた。デューイはまた大学図書館は大学の所在している都市の知的生活の中心として大切な機関であると考え、図書館をできるだけ長時間開き、休暇中や休日や夜間の開館にも努め、大学関係者のみならず一般市民の利用も歓迎した。ニューヨーク図書館クラブや日曜学校図書館連盟や児童図書館協会等のために会合の場所として図書館を提供した。図書館協力の必要性を痛感していたデューイは、ニューヨークとブルックリンの公共図書館でとっている雑誌のユニオン・リストを作った。コロンビア大学図書館では 3 万冊の図書を大閲覧室の開架書棚にならべ、社会科学と自然科学の 2 分野のそれぞれの専門家をパブリック・サービスのデスクに配置して、資料の利用を助け相談にのらしめ、レファレンス・サービスを行なった。時間と手間のかかる参考質問には有料で応ずる制度もはじめた。図書の返却がおけると教員からも延滞料をとりたてた。これらの事柄は、外部の人々には勿論、大学内の教員からも、進歩的ですがすぐれたサービスであるという感銘を与えたが、一部の教員からは十進分類法はわかりにくいとか罰金を容赦なくとりたてるとかの不満も出た。

1884年5月に図書館員養成問題に関する特別委員会はライブラリー・スクールの創設を許可する決定はしたが、大学当局はこのために特別予算を組むことはせず、授業は図書館職員が正規の仕事をした上で行うこととし、それも図書館の建物以外を使ってはならないということであった。その他にも種々の困難があつて、3年後の1887年1月までスクールを開くことができなかった。しかも開講の前日デューイは、ライブラリー・スクールのために新築の図書館を使ってはならぬとの通告を受けた。その理由は、当時コロンビア大学は男子のための大学で、男女共学ではなかったのに、ライブラリー・スクールの新生は半数以上が女子であったためである。デューイは女子も男子と同様に教育されるべきであるとの信念をもって、女子の入学を取り消そうとはせず、デューイに好意的であった学長の Barnard 博士は評議

員会との間の調停に骨折ったがうまくゆかず、病に倒れる始末であった。

デューイは最初 10 人ぐらいの学生数で発足するつもりであったが、倍の 20 人も集まり、この人数を収容する場所がなく、やむを得ず図書館に続く礼拝堂の屋根裏の物置を片付け、こわれたテーブルの足を打ちつけ、足りない椅子はデューイの家からはこんできて、兎にも角にも最初の授業を行なった。

大きなハンディキャップはあったが、ライブラリー・スクールは内容の充実した教育を行なった。1887年6月20日付でデューイは最初の年次報告を提出したが、それによると開校以来 108 の講義が行なわれたが、そのうち 72 はデューイ自身、26 は W. S. Biscoe、10 は G. H. Baker が担当し、残りの 75 は外部からの有志が行なった。この外からの講師の顔ぶれは堂々たるもので、図書館界の各方面で高い位置につき重要な役割を果している人々であった。そのごく一部をあげると次の通りである。

- J. S. Billing—National Medical Library, Washington, D. C.
- R. R. Bowker—Publishers Weekly and Library Journal
- R. B. Pool—Chicago Public Library
- G. H. Putnam—G. P. Putnam's Sons
- A. R. Spofford—Librarian of Congress

しかし何といってもデューイがライブラリー・スクールの索引車であった。彼は、ライブラリアンシップは単に職業であるにとどまらず、聖職であり、図書館は奉仕のための場所であると説き、彼の図書館サービスへの情熱を学生にふきこんだ。

しかし大学評議会は、女子の学生は認めないという大学の意向を無視して平然として彼等を教えていることを不都合とし、その他にも考え方の違いやゆきちがいがあり、絶えずいざこざが起っていたが、遂に 1888 年 12 月 2 日にデューイはコロンビア大学図書館長の職を退くべきであるとの決議がなされ、翌年 1 月にそれが正式に決められた。

これより少し前 1888 年 7 月にデューイはオルバニーにあるニューヨーク州立大学の卒業式で、「州の教育事業と図書館」と題して講演を行ない、図書館の重要性を強調したが、それが非常に好評で、その後州立図書館の顧問となり、同図書館の改組について献策したりしていたので、コロンビア大学を去ると、オルバニーに移って州立図書館長、兼州立大学評議会議長となった。

VI. オルバニー時代

オルバニーに移り住むとデューイは彼のライブラリー・スクールをオルバニーの州議会議事堂内に移した。これがよい場所とは思われなかったが、デューイが去ればコロンビア大学ではライブラリー・スクールを継続する見通しはなかったから、やむを得ずの措置であった。ここでもライブラリー・スクールのための予算はなかったから、きわめて不安定な基盤の上になっていた。しかし Biscoe をはじめデューイに心服する助手達がコロンビアを去ってついて来ていたから、これらの人々によって生き生きとした図書館学校教育を続行した。このライブラリー・スクールが後に有名な New York State Library School となり 1926 年までここに存続した。デューイが追われてから約 40 年後の 1926 年コロンビア大学はこのライブラリー・スクールをもとに戻した。デューイ達の教育した卒業生は米国内の図書館サービスに生命をふきこみ活発にしたのみならず外国にも進出して活躍した。彼等の手によって次々と新しいライブラリー・スクールも設立され、図書館員という職業を専門職として確立するのに貢献した。デューイ自身も長い生涯にたくさんの業績を残したが、ライブラリー・スクールが最も純粹に満足することを得た仕事であった。

オルバニーにおいてもデューイは極めて精力的に働き州立図書館長、兼州立大学評議会議事長のかたわら相変わらず図書館協会の仕事を続け、十進分類表の改訂をし、ライブラリー・スクールの再建し、ライブラリー・ビューローを経営した。この頃デューイは教育者としての信念を益々強め、彼の考えによれば、図書館は教育の場においては心臓部ともいふべき大切なものであった。図書館が教育に役立つためには、訓練された図書館員、図書館に対する支持、図書館の重要性の認識、資料の充実公開等が必要である。これらを得るためにデューイはライブラリー・スクールの卒業生ができるだけニューヨーク州内にとどまるよう説得し、図書館への州の補助金の獲得に努力し、移動図書館の制度を作り、良書のリストを作り、訓練を受けていない図書館員のために仕事の手引きのパンフレットを作り、州議会議員に対してレファレンス・サービスを始めた。また盲人のための図書のコレクションを作り、医学の部門、稿本のセクション、婦人室、児童室等を開設した。

さらにデューイは州全体の教育組織の改善に取り組んだ。当時州の高等教育は州立大学評議会の管轄下にあ

り、初等中等教育は州の社会教育局が担当していたが、これを一本化すべきであるというのがデューイの意見であった。これには賛否両論あり、激しい論争がくりかえされたが、結局 1904 年に一本化することがきまり、その長に Andrew S. Draper が選ばれ、デューイはこのなりゆきに喜び Draper に期待したが、Draper はデューイを好まず、デューイの州立図書館の経営を批判した。デューイはニューヨーク州立大学評議会事務長になってから 11 年間その職についていたが、コロンビア大学在任中と同じように、デューイの周辺には絶えず大小さまざまないざこざがあった。その大部分は大した事ではないのに新聞種となり、論争の嵐の中心となった。たとえば、自分のもうけのために十進分類表をライブラリー・スクールの教科書として使わせているという記事が新聞に度々載ったが、実際にはそのような批判を避けるためにデューイは無償で学生に分類表を与えていた。屋外運動の信奉者であったデューイは学生や教職員に自転車に乗ることをすすめ、自転車を卸し値で買入れて彼等に売った。これも問題になったが、よく調べたところ、デューイは原価で売ったし、分割払いでもよいことにしたから、全然もうけはなかったことが判明した。一時期自分の姓を Dui と綴ったことも問題になり、周囲の説得で Dewey に戻したことは前に述べた。大きな家を購入して学生や図書館員達に開放していたが、その家の入手は収賄ではないかと疑う人もあったが、いつも採算を無視して活動するデューイであるから、この家も何重にも抵当に入っているものであった。このように種々の誤解を受けたり、争いを起すことは、彼が立派な考えに基づいて活動し前進してゆく上でマイナスとなり、もっとも致命的な攻撃は、彼の潔白さとか職務上の業績とは全然かかわりのないところで受けた。デューイは 1893 年に Lake Placid という森と湖の景勝の地にクラブを作ったが、それが次第に発展してくるにつれて、クラブのことにかまけて彼の本来の仕事にさしつかえするというのが非難のはじまりであった。彼をよく知っている議会図書館の館長 Herbert Putnum は、いかにデューイがたくさんの本来の職務を熱心に遂行しているかを述べて弁護した。しかし攻撃の真の意図は別のところにあり、Lake Placid Club の会員にユダヤ人を入れないという会則に対するユダヤ人からの攻撃で、複雑な人種問題がからんだ。個人的なりクリエーションなクラブであるからどのように規則をきめてもさしつかえないわけであるが、権力をもった高い地位にあるユダヤ人から陰に陽

に攻撃され、評議員会にデューイ罷免の要求が出され、デューイは Lake Placid Club を捨ててオルバニーでの職をとるか、オルバニーを去って Lake Placid Club をとるかの選択にせまられ、前者にとどまることの困難さを見通して、レーク・ブラシッドに移ることをきめた。そして彼は 54 才で長い間の図書館人としての経歴をとじたのである。

VII. レーク・ブラシッド時代

デューイ夫婦は 2 人とも花粉のアレルギーに悩まされ、毎年その季節になると色々な所に転地していたが、たまたまデューイ夫人の妹の Miss Lydia B. Godfrey が見つけたレーク・ブラシッドという所へ招かれて行き、その気候や景色のよいのがすっかり気に入り、1893 年以来毎年訪れていた。そして友人、知人をも招いていたが、デューイはかねてからあまり豊かでない図書館員や教員の休暇に訪れる共同の別荘のようなものがあったらよいと考えていたので、1896 年に義妹の家の隣りに荒れはてた古いホテルがあったのを買い、クラブを作ることにし、レーク・ブラシッド・クラブという名称の会員制の法人組織を作った。このクラブの目的は、美しい自然に恵まれた環境の中で、夏冬の休暇を健康増進、休養、リクリエーションのために安い費用で過ごすためのものであった。デューイが図書館に関する職を退き、レーク・ブラシッド・クラブに全力を投入するようになると、クラブは目ざましく発展し、最初 5 エーカーの土地の上の借家で始めたものが、彼の 80 才の誕生日には 10,600 エーカーの敷地に 412 棟の建物を擁する大クラブとなり、一時期はフロリダ州中部に支部を作った。しかしあまり大きくなりすぎ、世界的経済恐慌が訪れると、クラブの改組や財政の建てなおしが必要になった。

1922 年妻のアニーは病を得、失明し、死亡した。彼等の間には 1 人息子 Godfrey が生まれたが夭折した。デューイはアニーの死後 2 年して、アニーの献身的な助手であった Emily Mckay Beal と結婚した。1931 年 12 月 10 日 80 才の誕生日を迎えた時、デューイは友人知人に回想を記した手紙を送ったが、その中で自分の業績をまとめ、もっとも重要であったのは、1876 年につくった 3 つの協会、専門雑誌の発行、十進分類表、ライブラリー・ビューローの設立、レーク・ブラシッド・クラブの事業の 5 つとした。ライブラリー・スクールのことはぬけていたがこれは追伸の中で詳しく述べ、コロンビア大学が 12 月 10 日を創立者の日として記念することをきめたの

を誇らしげに告げている。知人達はデューイが90才代に入って意気益々盛かなことを喜んだが、誕生日から16日後の12月26日に脳出血で他界した。

おわりに

デューイは背が高く、頑丈な体つきで、説得力のある話しぶりをした。会合などで人の話をきく場合、その要旨を掴み、すばやくまとめることができ、人々の意見の相異点を明らかにするのがうまかった。婦人に対してはいつも温かくやさしく、男子と差別することなく教育し、重要な地位につかせた。いつもまじめで真剣で活動的だが、時に頑固で柔軟性がなく、かけひきができなかった。

生れつきのオルガナイザーで、人々を鼓舞して彼のまわりに有能な人々を集めることができた。

彼は時間を無駄にしないことに努め、結婚した当時夫婦で活動の週間、月間の予定表を作り、その通りに実行した。しかし彼は到底やりきれない程の約束を誰彼なくした。晩年ニューヨークの歴史について書いてほしいと頼まれた時、彼は約束したことの20年分おくらせているのだと言ったという。このようにいつも過労で極度に忙しかったが、金曜日の夜には、たとえ主人や主婦が留守でも家を解放して学生、教師、図書館員を歓迎した。そこではダンスや合唱、朗読、討論、トランプ、ピンポン、玉突き等が行なわれ、戸外ではサイクリング、乗馬等が行なわれた。図書館やライブラリー・スクールの訪問者は、しばしば家に泊めてもらったり、駅まで送り迎えし

てもらったりした。

デューイは修めた学業も立派な名誉博士号ほかたくさん名誉称号をおくられた。コロンビアやオルバニーでの彼の与えた影響力は彼が去って後も長く続いた。デューイの回転の早い頭脳から色々な考えがほとぼり出て、その実現に突進したが、周囲の人々に彼の考えを理解させる忍耐力に欠けていた。彼と異った意見をもっている人を理解することができなかった。彼は自分と違った意見を持つ人を憎むことはなかったので、他人にも同様であることを期待した。このように矛盾を含んだ複雑な人物を正しく伝えることはむずかしい。しかしとも角デューイは図書館史上稀に見る影響力のある有能なライブラリランであった。

- 1) Rider, Fremont. *Melvil Dewey*. Chicago, American Library Association, 1944.
- 2) Dawe, Grosvenor, comp. *Melvil Dewey: seer: inspirer: doer, 1851-1931*. Lake Placid, N. Y., Lake Placid Club, 1932. p. 282-3.
- 3) Dewey, Melvil. "Decimal classification beginning," *Library journal*, vol. 45, no. 4, Feb. 15, 1920, p. 152.
- 4) 頒布部数は、11版までは印刷した部数、それ以後は実際に売りさばいた部数で、それぞれ Rider の *Melvil Dewey*, p. 32 と *Encyclopedia of library and information science*. New York, Dekker, 1969. vol. 3, p. 136 による。